

1. 気象概況 (中野市長丘地区気象ロボット観測データによる)

月間	旬別	上旬		中旬		下旬		月間		特記・コメント
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	
2月	平均気温(°C)	-2.2	-1.7	-1.3	-0.6	-2.6	0.8	-2.0	-0.5	月間平年比-1.5°C
2月	降水量(mm)	45.0	18.7	26.5	38.9	16.5	9.5	88.0	67.1	月間平年比131%
2月	日照量(h)	40.4	49.8	36.9	45.5	45.7	48.6	123.0	143.9	月間平年比85%

2022 2月気象ポイント解説

- ◆ 気温：最高気温 9.1°C (2/15) 最低気温 -15.2°C (2/25) -10°C以下 9回 (2/7、12-13、18-19、23-26)
- ◆ 降水量：8.5 mm (2/2)、9.0 mm (2/5)、9.5 mm (2/6)、8.5 mm (2/7)、7.5 mm (2/10)、12.5 mm (2/18)、7.5 mm (2/22)
- ◆ 日照量：2月上中旬少→2月下旬並
- ◆ -10°C以下観測：計 29回 最低気温 -17.4°C (1/22) 12月 5回/1月 15回/2月 9回
- ◆ 豪雪情報：最大積雪深 188 cm(田上 2/7) 累計降雪量 812 cm(田上 12/18-2/28) (参考：2018年度累計降雪量 525 cm (田上 12/9-2/15))

2. 生産の経過・病害虫発生状況・今後の対策

【生産特記 2022】

- ① 生産基盤 (推定)：ぶどう 346ha (昨対+3)・りんご 150ha・もも 83ha・和梨 12ha・西洋梨 6ha・桜桃 7ha・柿 6ha・プラム 38h
- ② 開花予想：プラム 4/5 もも 4/10 ナシ 4/20 ふじ 4/25 巨峰 6/5 シャイン 6/10
- ③ ぶどう：出荷量累計 (昨対)：全体 93%=640,000箱 (5kg) (内訳：シャイン 97%・加工 162%等・シャインパック 121%他) *1/31 現在
- ④ 立ち木
 - ◆ 雪害：R3年末からの降雪により、長丘地区山手、柳沢、田上、岩井地区のりんご・もも等で枝折れ散見。
 - ◆ りんご：R3問題事項 ①褐斑病 ②腐敗性病害 (輪紋病・炭疽病) ③ハダニ類
 - ① 褐斑病原因：新梢繁茂・5-6,8月中旬豪雨、②腐敗性病害原因：梅雨時期防除・8月中旬豪雨、③ハダニ類原因：8中-下の高温
 - ◆ R3出荷量 (昨対)：りんご 50~60%、もも 110%、和梨 30%~40%、西洋梨 90%、プラム 160%、おうとう加温 49%露地 64%
柿 おひな柿 83%、ころ柿 55%、琥珀の華 47%
- ⑤ New ハウス
 - ◆ サクランボ：被覆計画棟数 20棟。3/4時点 被覆棟数 11棟 (昨年 12棟)。モモ：1棟 被覆済。プラム：1棟 2/14 満開。
 - ◆ 積雪量多く、燃油価格も高騰していることから例年よりも被覆遅れている。
 - ◆ ぶどう：計画 130棟・20ha。1/31時点被覆 6件・10棟。全体に昨年より被覆遅れる見込み。初出荷は4月末 (ビラックビート等)。

【参考情報 *関係機関資料より】

- R4 りんご黒星病防除ポイント
 - ◆ DMI剤 (スコア等) は基幹薬剤として使用しない ⇒ 耐性菌が発生した場合、開花期の散布で果実被害に直結する恐れがあるため
 - ◆ Qoi剤 (フリント・ナリア等) は単用では使用せず、効果の高い殺菌剤を使用する ⇒ 単用により越冬伝染量が増加し、翌年 (R5)の黒星病防除が低下するため
 - ◆ 黒星病多発園は10月上旬まで防除を徹底する ⇒ 翌年 (R5) 密度減らしのため
 - R3 もも核割発生率と防止対策
 - ◆ 発生率 (昨対) サマクリスタル 78%、なつっこ 18%・川中島 4%・あかつき 49% ⇒ トータルでは昨年より少なかった結果。
 - ◆ 対策：①急激な着果制限防止 (摘蕾・予備摘果・仕上げ摘果の適正時期実施) ②硬核期中の摘果は避ける (目安 6/10-30頃) ③施肥量調整 (強樹勢化させない) ④あかつき等の発生率の高い品種は本摘果 (6月上旬) までの着果量をやや多めにし、見直し摘果 (7月) で対応する
 - ◆ 注意！ 特に硬核期の急激な摘果により、収穫時に核割れ多発のケースが見られます。
 - シャイン：R3問題事項 ①粒肥大不良 ②成熟遅延 ③未熟粒混入症多発
 - ① 肥大不良原因：7月上旬低温・日照不足、着果過多、新梢繁茂等 (暗い園地)、② 成熟遅延原因：8月中旬豪雨・9月上旬低温、8月中旬~9月上旬極度の日照不足、着果過多、③ 未熟粒混入症多発原因：光合成産物不足、着果過多、土壌水分の変動
- 着果過多の見直し対策 (例)：早めの花穂制限 (1新梢1花穂、花穂形状の悪いものは積極的に除去等)、花穂制限による果房管理時間を減らし、新梢管理時間を作る (=明るい園地作り)
- クイーンルージュ関係
 - ◆ 樹勢による着色への影響：R1調査では新梢基部径が細いとアントシアニン含有が多い傾向
 - ◆ 着色向上技術：事例 白色袋の被袋したままの果房では仕上がりが淡赤色であったが、着色開始1週間後、3週間後に除袋処理を行った果房では着色向上効果がみられた (着色指数で6以上)
 - ◆ 果てい部裂果：収穫前の降雨が発生の一因となる可能性あり。対策としては着果過多を避け、新梢管理の適正化による成熟がスムーズに進むように管理し、裂果リスクのある期間をできるだけ短くすることが考えられる。
 - ◆ JA中野市では主に施設向けに収穫前の掛け替え用袋として、透明袋 (ビコー袋) の取り扱いをしています。